

# 郷土直方

直方郷土研究会・会報37号



新旧直方駅 (平成23年4月29日撮影)

## 目次

木屋瀬から見たB 29の墜落	数住守一	1
日清戦争における玄洋社と直鞍出身者	榊正澄	5
『高尾山真如寺縁起』が語るもの	牛嶋英俊	14
(連載) 鞍手軌道とその周辺(3)	篠原義一	17
―総会講演から―		
山頭火と北九州の俳友	仲江健治	19
―例会発表―		
・臼井六郎の仇討について	不破保	22
・植木に墜落したB 29と捕虜搭乗員	牛嶋英俊	25
特別講演		
・ここまで分かった直方駅	藤原恵洋	26
・直方ゆかりの文化人	榊正澄	27
・炭坑機械化の先駆者・片山逸太	祖父江陽一	28
・直方市内の清正公信仰	篠原義一	30
―資料紹介―		
旧筑豊工業(鉱山) 学校所蔵の文化財	玉井昭次	31
「芝原騒動」とその顛末	渡辺大	33
西徳寺の杉山玄丹墓誌	国友千昭	34
尖底土器と会席料理	金山輝代	35
事務局報告		36
編集後記		36

# 木屋瀬から見たB29の墜落

## 数 住 守 一

昭和二〇年三月二七日は、北九州大空襲のあった日である。

私は、丁度大学の春休みになったばかりであったが、自宅に早く帰りがたがる一人の後輩を無理に我が家に誘っての帰省であった。夕食も入浴も済み、寢床に就いたばかりの時、空襲警報が鳴り響いた。

すぐに庭に飛び降りて防空壕の入り口に佇んで空を見上げた。(この防空壕は庭の片すみを深く掘り下げた穴の中に、岩尾酒造からゆずられた五尺の桶という醸造用の酒樽を横に倒して、床になる所に板を張り、電線と電燈を用意し、上に厚く土を盛り上げた物で、中に入ると酒の香りが漂い心地の良い壕であった。)

「敵機編隊は、豊後水道を北上中」というラジオ放送の後に、北九州の大空襲があるというのがその後の決まり事みたいになったが、この夜はその皮切りであったらしい。

福智連山の向こう側で大空襲が始まっていた。アメリカ空軍の最新鋭重爆撃機B29という四発の大型機が、整然と三機ずつ編隊を組み、亜成層圏といわれる高度凡そ一万メートルの上空から来て

は去りつつ爆弾の雨を降らせていた。

木屋瀬東に金剛山、その南に尺岳、雲取山、福智山、北側に続く嶺々のはては帆柱山。その山々の尾根に、照空燈の陣地や高射砲陣地があるらしく、照空燈のライトが美しく交差していた。その一つが敵機を捕らえると、すぐに他の光もそれに加はり、集中した光の焦点に銀色の敵機の姿があり、離さずに追跡していた。それは美しい眺めでもあった。

ふと気がつくとき、それらの編隊から離れて、ただ一機だけ南方に飛ぶB29の姿があった。帆柱山から金剛山上空に向かふ途中で、鳥で言へば心臓のあたりにポツンと赤く光るのが見えた。火災をおこしているらしい。日本軍の砲火にやられた為に編隊から離れたのだと思はれた。

そのすぐ後ろから、日本軍飛行機からの曳光弾らしい赤い光が二度、三度掃射するのが見えたが、いづれもB29の下方を平行に払うばかりであった。

どうやら友軍の飛行機はB29の高度まで上昇するのが不可能のようであった。そのうちに今度は斜め下方から上昇しつつ射撃したらしく、これは命中したように見えた。丁度金剛山上空あたりで

あった。

今になって思ふと、この敵機は既にこの時、操縦機能の一部に故障をきたして、乗組員の意思通りには動かせない状態に陥っていたと思はれる。もし自由に操れる状態だったならば、何もこちらに向かふ必要はなく、豊後水道を目指し、そのあたりの海に不時着水すれば、火災も消えて、全員救命出来たかもしれない。

このB29は大きく右巻きの螺旋形を描いて飛びながら次第に高度が下がったらしい。機内の火災は次第に大きくなり続けていた。

はじめのうち敵機は英彦山のあたりに墜落すると思つて見ていたところ、香春岳のあたりから、ぐるりと西に向きを変えた。真南に来た頃はさらに低くなり火災もひどくなっていた。博多辺りに落ちるのかなと思つているうちに北に向きを変えた。芦屋辺りに落ちるかと思ふ間もなく、植木駅の方へ向こう近くに来たと思はれるところ、東に向きを変え、こちらに向かつてまっすぐに飛んで来た。

敵機の色は火災の為オレンジ赤色に輝き、映画で見る墜落機のような嫌な爆音を響かせながらまっすぐにこちらに向かつてくる。

高度はますます低くなり、見える大きさはぐんぐんと大きく、幅を拡げながら迫って来た。

これを見ながら咄嗟に思った。ああ、木屋瀬が全滅する！積んである爆薬とガソリンの引火の為、吹き飛ばされて皆焼け死ぬ。俺も今夜が最後だ。

嗚呼！なぜ連れて来たんだらう。母親が待っているので早く帰りたいと言う後輩を強引に連れて

立てたられ、ならされて何処がどうなっていたのかわからぬ状態にされてしまった。

米軍が墜落現場の調査に動き始めたのは、その後かなりの日時が経過してからであった。もっと早くに調査すれば、もっとはつきりとわかっただろうに。今頃ではもう遅いよ、と思ったのを思ひだす。それでもかなりの事が判ったらしい。

B 29の墜落は日本国中でも稀にしか無い事例だっただけに違いない。この近くの人々にとって大事件であった。しかも被弾まもなくのB 29が、次第に火災が大きくなり墜落するに到る迄の一部始終をつぶさに観察出来たことは偶然とはいえ、掛け替えの無い機会に恵まれたものであったと思ふ。

こうして、この出来事を後の世の人達の為に書き残す事が出来るのは、誠に望外の幸せである。私は今九〇歳である。今迄長生き出来た事とあわせて神佛に深くお礼の祈りを捧げたい。ありがとうございます。

また、墜落した米兵にも、いとしい家族があっただろうに。戦争に駆り出されたばかりに、無残な戦死を遂げねばならなかった。まことに可哀想である。神はきつと彼らの魂をなぐさめて下さるだろうと思ふ。彼らの魂の為に平安を祈りたい。

合掌。

(すずみ しゅいち(寄稿))

筆者は大正一〇年生。昭和二二年九州帝国大学医学部卒業。医学博士。平成十二年まで数住内科医院院長。木屋瀬在住。

# 日清戦争における

## 玄洋社と直鞍出身者

神 正 澄

はじめに

『郷土直方』第三十六号において「日清戦争前後の筑豊炭田・夢野久作著『犬神博士』の虚像と実像」という題目の論文を発表したが、資料準備の段階で日清戦争(明治二十七年一八九四〜二十八年一八九五)と玄洋社の関わり、その中で直鞍地区出身者(向野堅一と山崎羔三郎)が活躍したという、ほとんど知られていない史実にたどりついたので紹介する。

### 第一章 日清戦争全般について

#### 一、戦後の百科事典の説明『新明解百科語辞典』

(平成三年一九九一・三省堂)の記述は次の通り。

「朝鮮の支配権をめぐる、一八九四年から翌年にかけて日本と清国の間で戦われた戦争。日本軍は黄海海戦に勝利、遼東半島を制圧、九五年四月下関で講和条約締結。」(写真1)

日清戦争勃発の誘因とされる東学党の乱については「甲午農民戦争」として次のように記載されている。「一八九四年(甲午の年)朝鮮南西部の全羅道を中心起こった反封建・反侵略の農民反乱。民族宗教の信者集団である東学党が中心となっ

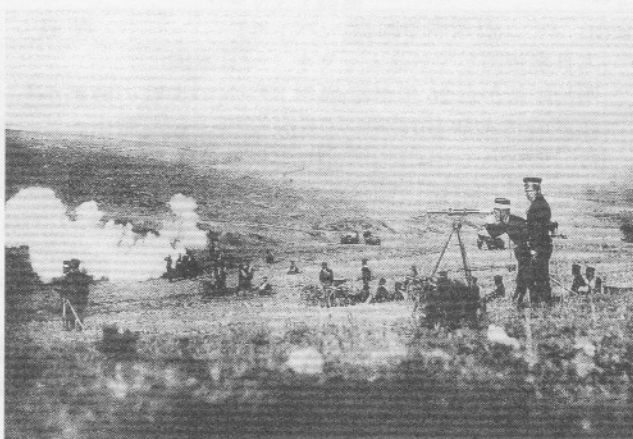


写真1 旅順西方で砲撃する日本陸軍の山砲中隊  
「日録20世紀・明治という時代」(平成11年)から

たため、東学党の乱ともよばれる。反乱鎮圧を名目に清と日本が軍事介入し、日清戦争へと発展した。」

【コメント】これが戦後の歴史学者による一般的な見解といえよう。

#### 二、戦前の百科事典の説明

戦前の「大日本帝国」時代において学校教育で

は日清戦争についてどのように教えられていたか、現在では入手困難な資料であるため、全文を引用する。『学習百科辞典』(昭和九年一九三四初版・三省堂) \* 書名を含め新字・新かなづかいに変更。見出しは「明治二十七八年戦役」で、「日清戦争」ではない。これが政府の正式名称であった。「明治二十七年六月から二十八年四月に亘って日本と清国(支那)との間に起った戦役で、日清戦争ともいう。」

(原因)

日本は始めから朝鮮を独立国と認めて之を助けたが、清国は朝鮮を自分の属国と称し、之を併呑しようとした。当時、朝鮮国内にも日本に頼って独立を全うしようとする独立党と、清国に仕えようとする事大党とがあって相争い、明治十五年、十七年の二度にわたって「京城の変」が起り、その結果、我が国は清国と「天津条約」を結んで、将来朝鮮に出兵する際には互に通知をすることを約した。

然るに清国は、その後も私に兵を朝鮮に留め、事大党を助けて威力を振るい、政治を乱したので、朝鮮の国民はその暴政を憤り、遂に「東学党」の内乱が起った。この時清国は、属国の国難を救うのであるといつて大兵を朝鮮に差向け、之を我が国に通知したので、我が国も、居留民・公使館の保護のために出兵し、その為に東学党の乱は平いだ。

この乱の後、我が国は、協力して朝鮮の内政を改革することを清国に申し出たが、彼は之に応じないばかりでなく、再び大兵を朝鮮に送って、我

が国を威圧しようとした。

(戦況)

たまたま明治二十七年七月、豊島沖で清国軍艦が我が軍艦を砲撃したので、我が軍艦は之に応戦して打破り(「豊島沖の海戦」)、次いで陸軍も成歓(京城の北【筆者注・南が正しい】)にあるで清兵を破った。

そこで明治天皇は、同年八月、宣戦の大詔を下され、大本営を広島に進め給うたので、我が軍の士気は大いに振るい、「平壤の戦」「黄海の海戦」「威海衛の戦」等に打勝ち、進んで国都北京に迫ろうとした。

(結果)

それで清国は大いに恐れ、李鴻章を講和全権として我が国に和を請わせたので、我が国では伊藤博文等の全権委員が之と下関の春帆楼で談判して「下関条約」を結び、朝鮮の独立を認めさせ、償金三億円を出させ、台湾・遼東半島を割譲させなどしてこの戦役は終を告げた。次いで「三国干渉」が起って遼東半島は支那に還したが、この役後我が国威は大いに揚った。

【コメント】自国の行動を美化して記述する傾向が強いことは古今東西、いずこも同じであることがわかる。

日清戦争の歴史的意義や、個別の陸戦・海戦の経過を詳述することは本稿の目的ではないので筆者が興味を覚えた事項について、第二章および第三章で述べる。

第二章 日清戦争前夜と現在の日本の類似点

日清戦争が始まったのは百十七年前で、次の通り現在の日本とは大いに状況が異なっている。(表1)

表1 日清戦争前夜と現在の比較

項目	日清戦争前夜	現在
国名	大日本帝国	日本国
時点	明治維新から26年が経過。江戸時代を知る人がまだ多かった。	先の大戦の敗戦から66年が経過。戦前戦中の時代を知る人は少なくなった。
政治	大日本帝国憲法に基づく立憲君主制国家。男性高額所得者だけの限定選挙	日本国憲法に基づく民主主義国家。20歳以上の男女による普通選挙
経済	農業中心の東洋の小国	高度成長を終えた世界第二位の経済大国
軍事	外征可能な近代的陸海軍を有する。日本国内に外国軍の基地はない。	専守防衛のための自衛隊を有する。日米安保条約に基づき米軍が駐留している。

嘉永六年(一八五三)黒船来航の翌年の日米和親条約による開国の後、明治元年(一八六八)の明治政府の成立、明治十八年(一八八五)の内閣制度創設、明治二十二年(一八八九)の大日本帝

表2 日本の領土の推移(地域別)

地域	日清戦争前夜	現在
千島列島	日本領(ウルップ島以北を含む全部) ・安政元年 1854 の日露和親条約によりウルップ島以北はロシア領、エトロフ島以南は日本領とした。 ・明治 8 年 1875 の千島樺太交換条約によりシュムシュ島以南の全千島列島を日本領とした。 (カムチャッカ半島との間に国境線)	ウルップ島以北はロシア領(正式ではない) ・昭和 26 年 1951 のサンフランシスコ条約により千島列島の領有権を放棄(ソ連は未署名)。エトロフ、クナシリ、シコタン、ハボマイの北方領土四島(歯舞群島・色丹島は地理的には北海道の一部とされる)は一度もロシア領になった歴史はないが、先の大戦末期にソ連軍が侵攻し、ロシアによる不法占拠が継続中である。
樺太	ロシア領 ・安政元年 1854 の日露和親条約により日露両国民雑居地となる。 ・明治 8 年 1875 の千島樺太交換条約によりロシア領となる。 ●日露戦争後のポーツマス条約により南樺太が日本領となりロシアと陸上(北緯 50 度)で国境を接するようになった。	ロシア領(正式ではない) ・昭和 26 年 1951 のサンフランシスコ条約により南樺太の領有権を放棄(ソ連は未署名)。
朝鮮	李氏朝鮮 ●日露戦争後の明治 43 年 1910 の韓国併合により、朝鮮総督府を置く。	敗戦により統治権を放棄し、昭和 23 年 1948 に大韓民国(南部)および朝鮮民主主義人民共和国(北部)が成立した。 ・サンフランシスコ条約により正式に領有権を放棄。
台湾	清国領 ●日清戦争後の下関条約により日本に割譲され、台湾総督府を置く。	敗戦により統治権を放棄し、中華民国が統治権を取得。昭和 24 年 1949 の中華人民共和国成立後も中華民国の統治が続く。 ・サンフランシスコ条約により正式に領有権を放棄。
南洋群島	スペインの植民地→ドイツの植民地(マーシャル諸島は 1885、他の諸島は 1889) ●第一次大戦後のヴェルサイユ条約により大正 9 年 1920 にドイツ領から日本の委任統治領になり南洋庁を置く。 ・マリアナ諸島(サイパン島、テニアン島など) *グアム島はアメリカ領 ・パラオ諸島(ペリリュー島など) ・カロリン諸島(トラック諸島など) ・マーシャル諸島(ビキニ環礁など)	先の大戦中に一部を除き米軍が占領し軍政。 昭和 22 年 1947 アメリカの信託統治領に。 昭和 26 年 1951 のサンフランシスコ条約により正式に領有権を放棄した。現在は →北マリアナ諸島はアメリカの自治連邦区 *グアム島はアメリカの準州 →パラオ共和国 →ミクロネシア連邦 →マーシャル諸島共和国

国憲法の発布(これにより大日本帝国が正式国名となる)、翌年の第一回総選挙と帝国議会の開催、と急速に近代国家の道を歩み始めたが、日清戦争の直前における領土は表2の通り、千島列島を除

けば現在の日本とほぼ同じであった。その後、対外戦争に勝利の都度、勢力範囲の拡大が続いたが、日清戦争から約五十年後の敗戦によりすべてを喪失し、日清戦争以前の固有の領土

に戻った。(千島列島を除く)(表3)

表3 日本領土の推移(時系列)

日清戦争	1894~95 年	台湾
日露戦争	1904~05 年	南樺太・日韓併合(1910年)
第一次世界大戦	1914~18 年	南洋群島(1920年)
満洲事変	1931 年	満洲国(1932年建国) ・これによりソ連と長大な国境線を接することになった。

第三章 日清戦争を描いた映像作品

一、劇映画

日清戦争を主題とした劇映画は次の一作品のみで、日露戦争に比べると少ない。(表4)

昭和三十一年(一九五六)の経済白書の「もはや戦後ではない」が流行語となったように敗戦から十三年が経過し、ようやく日清・日露戦争の時代を懐古する余裕が生まれてきたのであろうか。

昨今の日中関係を考えると、日清戦争(日本の勝利、清国の敗北という結末)を正面から描いた劇映画が製作される可能性はないと思われ、その意味で貴重な映像作品(極めてアナクロな内容からすると怪作といふべきか)と言えよう。(写真2)

二、テレビドラマ

NHKが平成二十一年(二〇〇九)から平成二十三年(二〇一一)の三年にわたって放送した大

表4 日清戦争を主題とする劇映画

時代	題名	製作	備考
日清戦争	天皇・皇后と日清戦争	昭和33年1958 新東宝・カラー・ワイド	前年の「明治天皇と日露大戦争」の記録的ヒットにより製作 総指揮：大蔵貢 (新東宝社長) 監督：並木鏡太郎 主演：嵐寛寿郎(明治天皇)

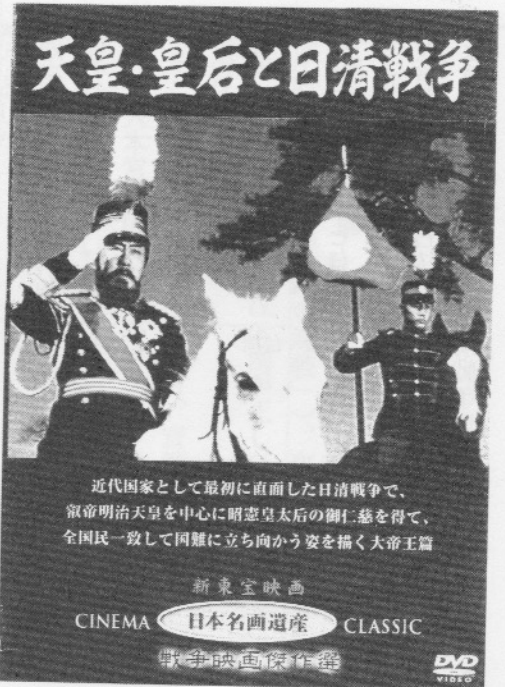


写真2 天皇・皇后と日清戦争(昭和33年)  
新東宝映画DVDパッケージから

それぞれのエピソードは、「坂の上の雲」に登場する人物の性格を観客に印象づけるためのものかも知れない。

東郷平八郎：沈着冷静  
秋山好古：泰然自若  
秋山真之：繊細多感

第四章 玄洋社の日清戦争への関わり

一、「犬神博士」に登場する玄洋社  
『犬神博士』の中で玄洋社に関する記述は次の通りである。

(一) 引用その一  
「ところが、こうした筑豊炭田の争奪戦に関する官憲派の横暴に対抗して起ったのが、有名な福岡の玄洋社の壮士達であった。

玄洋社というのは誰でも知っている通り、維新の革命に立ち遅れて、薩、長、土、肥のような藩閥を作り得なかつた福岡藩の不平分子が、国士をもって任ずる乱暴書生どもを駆り集めたもので、あるいは大臣の暗殺に【筆者注・明治二十二年(一八八九) 来島恒喜が大隈重信外相に爆弾を投げ右足切断の重傷を負わせた直後に自決した事件】、または議会の暴力圧迫に【筆者注・明治二十五年(一八九二)の選挙大干渉事件】、その他、

朝鮮、満蒙の攪乱に万丈の気を吐いて、天下を震撼していた政治結社であった。しかもその頭目と仰がれている榊山到【筆者注・頭山満と奈良原到の二人がモデルであるが、実際には両名とも玄洋社社長に就任したことはない】という男は、玄洋

社の活躍の原動力として、是非ともこの筑豊の炭

が陸上砲台を攻撃するが、反撃の砲弾が命中して部下を戦死させ動揺する。

(一) 威海衛攻撃  
秋山真之(本木雅弘)が乗組む巡洋艦「筑紫」

(二) 旅順要塞攻撃  
秋山好古(阿部寛)が指揮する日本軍騎兵隊(二百人)が旅順本道を偵察中に清国軍の大部隊(三千人)と遭遇するが、整然と退却し戦場を離脱する。

田を官憲の手から奪取せねばならぬと考えていたらしく、(以下略)

【コメント】この記述はあくまでも夢野久作のフィクションであり、歴史的事実ではないことに注意する必要があるが、『犬神博士』から「玄洋社」に接近した読者は著者の筆力(いわゆる久作マジック)によって刷り込まれてしまったのではないだろうか。(実は筆者もそうであった)

## (二) 引用その二

夢野久作は『犬神博士』のクライマックスである福岡県知事と玄洋社社長樋山到の対決の場面で玄洋社社長に日清戦争に関する次のセリフを語らせている。

知事「貴様たちの知ったことではない。この筑豊の炭田は国家のために入り用なのじゃ」

社長「ウム。そうじゃろうそうじゃろう。それはわかっとる。日本は近いうちに支那とロシアは相手えて戦争せにゃならん。その時に一番大切なものは鉄砲の次に石炭じゃけんなあ」

知事「……………」

社長「……………しかしなあ……………知事さん。その日清戦争は誰が初めよるか知っとんなさるな」

知事「やかましい。それは帝国の外交方針によって外務省が……………」

社長「アハハハハハハハ……………」

知事「何がおかしい」と知事はまっ青になって睨みつけた。

社長「アハハハハハハハ。外務省の通訳どもが戦争し得るもんかい。アハハハハ……………」

知事「……………それなら誰が戦争するのか」

社長「私が戦争を初めさせよるとばい」

知事「ナニ……………何と言う」

社長「現在朝鮮に行て、支那が戦争せにゃおられんごと混ぜくりかえしよる連中は、みんな私の乾児の浪人どもですばい。アハハハハ……………」

## (中略)

社長「ホンナことい国家のためをば思うて、手弁当の生命がけで働きよるたあ、われわれ福岡県人ばっかりばい」

【コメント】「久作ワールド」の登場人物の言葉をそのまま史実として受取ることができないのは当然であるが、『犬神博士』が福岡日々新聞(西日本新聞の前身)に連載されたのは昭和六年九月(七年一月で、日清戦争開戦は三七年前のできごと(現時点でオイルショック当時を想起する感覚)で頭山満はじめ当時の関係者も多数健在であった。もちろん当時の雰囲気はわからないが、「玄洋社社長の言動をこのように描いても新聞の読者は歓迎するだろう。」と久作が考えたのかもしれない。

## 二、玄洋社の位置づけについて

玄洋社の政治史および社会思想史における位置づけは、論者の立場によって異なり、これを紹介することは本稿の趣旨ではないので『玄洋社―封印された実像』(石瀧豊美著)の次の文章を引用するだけに留めておく。

「戦後、半世紀以上を経過し、『頭山満』、『玄洋社』という名前すら聞いたことがないという人が大部分のはずだ。玄洋社とそのメンバーは、時間とともに忘れられたのではない。ある時期から意図的に封印された、と言ったほうが実情に近い。

玄洋社について公の場で語ることをタブーとする気が確かにあった。福岡市中央区の玄洋社記念館(原書注・平成二十年(二〇〇八)五月末で閉館)は、頭山満をはじめ、ゆかりの人々の遺品を展示しているが、歴史研究者でここを訪れる人はまれだ。

玄洋社ほどの「日本史辞典」でも、政治結社と定義され、右翼の源流として位置づけられ、侵略主義のレッテルが貼られている。私の疑問はこの点にあった。玄洋社は政治結社なのか、侵略主義なのか。もちろん、それは従来の見方を単純に否定しようというのではない。問題は、玄洋社自体が、繰り返し語られたそういうステレオタイプな見方をはみ出してしまふことである。玄洋社は単に右翼ではないし、単に侵略主義ではないし、単に政治結社ですらない。もっと他の何かである。

## (中略)

玄洋社の、他に類のない特色はもうひとつある。それは、福岡市に根拠を置き続けたことである。私に言わせると、この一点をとっても、政治結社とは言えそうにない。玄洋社のメンバーは福岡県でも筑前、中でも旧福岡藩領域の出身者に限られ、しかも旧士族がほとんどだった。

政治的な影響力を増すために大衆を組織するとか、全国に支部を展開するとか、そのような方向性は全くゼロだ。

日清戦争、日露戦争、韓国併合…。近代のさまざまな大きな出来事に玄洋社は関わっている。しかも、玄洋社が何をしていたのかは、証拠を挙げて具体的に語ることができない。そのことがむしろ、

玄洋社の秘密活動の証拠とされた。逆理と言うし  
かない。」

【コメント】玄洋社の土着性に関しては、中央で  
人気作家となっても上京することなく福岡在住を  
続けた夢野久作にも共通性を感じる。彼は玄洋社  
に対して強い共感を覚えていたのではないだろう  
か。

### 三、結論

玄洋社の「アジア主義」に関する『玄洋社―封  
印された実像』の記述は次の通りである。

「自由民権運動の中から生まれた玄洋社は、や  
がて国内改革からアジアの革命へと目を転じた。  
これが玄洋社の「民権から国権への転向」と言わ  
れる問題である。(中略)

玄洋社は頭山を司令塔として、アジアへと活動  
の場を広げていった。韓国の親日政治家金玉均  
との交際、アギナルドのフィリピン独立運動への  
支援、孫文、黄興ら中国革命の志士の支援と革命  
への参加、インドの独立運動家ラス・ビハリ・ポー  
ス【筆者注・チャンドラ・ボースとは別人】をか  
くまったことなどはよく知られている。これらは  
政府の意に反してなされた行動であった。

隣の町へ行くような気安さで彼らは国境を越え  
ていった。アジアをヨーロッパと対立するものと  
して想定し、アジアの諸民族が一丸となってヨー  
ロッパの侵略に対抗するという考え方、いわゆる  
「アジア主義」の立場からであった。」

【コメント】玄洋社の所在地である福岡は朝鮮  
半島・中国大陸に極めて近く、その動向に強い関  
心を持つのは当然であった。

・『玄洋社―封印された実像』には玄洋社の活動  
に関する次の記述がある。

明治十五年の壬午事変に際して玄洋社の平岡浩  
太郎が義勇軍を送ろうとしたが、未遂に終わった。  
明治十七年の甲申事変で失脚した金玉均を頭山満  
らが庇護した。彼は日清戦争直前の明治二十七年  
に上海で閔妃の刺客に暗殺され、その遺体はバラ  
バラにされて朝鮮各地にさらされた。明治二十七  
年の東学党の乱に際しても、これを支援する活動  
があった。

・「玄洋社が日清開戦のきっかけを作った」とい  
うのはいささかオーバーにしても、こうした活動  
を背景に、軍人でも官僚でもない多くの民間の若  
者たちが大陸で活躍したのは事実と考えるとさしつ  
かえないと思われる。

## 第五章 大陸で活躍した直鞍出身者

### 向野堅一について

日清戦争裏面史の中で直鞍地区出身者の向野堅  
一と山崎羔三郎の名前が出てくる。明治が遠くなっ  
た現代では地元でもほとんど知られていないので、  
この機会に紹介して記録しておきたい。

### 一、向野堅一の生涯

向野堅一に関しては、平成二十一年(二〇〇九)  
五月七日の直方郷土研究会例会において、同氏の  
曾孫に当たる向野康江氏(茨城大学教育学部准教授)  
が「直方に生まれたつよくやさしい日本人」の演  
題で講演されており、また「NPO向野堅一顕彰  
会(筆者も会員)」が発足して会報発行が開始さ  
れ、平成二十二年(二〇一〇)九月十七日には殿

町の旧讃井小児科医院の建物に「向野堅一記念館」  
が開館して多数の資料が展示されているので、本  
稿では最小限度の紹介に留めておく。

(一) 日本人名大辞典(平凡社)から(新字・新  
かなづかいに改めた)

「向野堅一(一八六八―一九三二)

明治元年福岡県直方市【筆者注・当然、当時は  
市制施行以前であり正確には新入村である。】に  
生る。日清貿易研究所を卒えて日清役に通訳官と  
なり、金州半島の敵前偵察に唯一人生還して重要  
使命を果たした。のち台湾の土匪征討軍に従い、北  
清事変に際し我が派遣軍の用達となり、日露役ま  
た兵站部に関係して貢献するところ大であった。  
戦後、奉天に茂林洋行を経営、奉天商業会議所副  
会頭、正隆銀行重役となり満洲財界に重きをなし  
た。昭和六年九月十七日東京で没、年六十四。」  
【コメント】彼の命日は正に満洲事変勃発の前日  
であり、こよなく満洲を愛していた向野堅一にとっ  
て運命的なものを感じる。

(二) インターネットのホームページ「軍事情報・  
戦史」から

「明治元年(一八六八)九月四日、福岡県直方  
市生まれ、昭和六年(一九三一)九月十七日、上  
京中、脳血栓で倒れ、東京都千代田区神田駿河台  
の杏雲堂病院で死去、六四歳。」

明治二十三年(一八九〇)三月、福岡県立修猷  
館を退学。

明治二十三年(一八九〇)九月、上海の日清貿  
易研究所【筆者注・尾張藩士の子で陸軍中尉退役  
後の荒尾精あらおせいが玄洋社の頭山満の支援を得て上海の



英国租界の一角に開設した。】に入学、明治二十六年(一八九三)卒業。

明治二十七年(一八九四)八月、日清戦争の開戦、根津少佐から清国軍の秘密偵察の命令を受け諜報活動に従事。

明治二十七年(一八九四)九月、日清戦争で陸軍通訳官として第一師団付で従軍、明治二十八年(二八九五)まで秘密偵察に従事したが、奇跡的に生還した。しかし同僚の通訳官である山崎・鐘崎・藤崎らは秘密偵察中に土民に捕らえられ、清国軍により処刑。(国立公文書館に記録あり)

明治二十九年(一八九六)一月〜五月、台湾総督府司令部付き通訳官。

明治三十九年(一九〇六)一月、満洲の奉天で石炭販売を行う茂林洋行を設立。

明治四十一年(一九〇八)、硝子製造を開始、銀行を設立。

大正九年(一九二〇)、瀋陽建物(株)を設立、奉天化学工業(株)社長。

昭和六年(一九三一)八月、上京中に倒れる。【コメント】大陸に雄飛する夢を果たした明治の男の生涯である。なお向野堅一の詳細な経歴・写真は向野康江氏のホームページに掲載されているので参照されたい。

二、講談社の絵本に登場する向野堅一

昭和十五年(一九四〇)六月に発行された「講談社の絵本・西郷隆盛」に「特別読物・尽忠実談」として、この時期に大陸で活躍した人物が紹介され、末尾に向野堅一が掲載されている。向野堅一については「つよくやさしい日本人」とタイトル

がついていて、清国兵に捕縛されながら脱出し、現地の中国人村長の家族と交流する逸話が描かれている。文章は「敵中横断三百里」の有名作家山中峯太郎である。なお、氏名のふりがなが「むかいのけんいち」となっているのは資料不足のためであろうか。

向野康江氏の演題「直方に生まれたつよくやさしい日本人」はこれが出典と推測される。「講談

つよくやさしい日本人



写真3 「つよくやさしい日本人・向野堅一」講談社の絵本・西郷隆盛(昭和15年)から

社の絵本・西郷隆盛」の向野堅一に関する部分は、向野堅一記念館に展示されている。(写真3)

第六章 山崎羔三郎について

山崎羔三郎は鞍手郡山口村(現宮若市)の人。

「羔」の意味は漢和辞典によると「小羊」とあり、古い人名辞書には「ヤマサキ カウザプロウ」とあるので、「やまさき こうざぶろう」が正しい読みであろう。

「大日本人名辞書」、「東亜先覚志士伝」、「鞍手郡誌」などに詳細な記載がある。(写真4)

一、『人ありて一頭山満と玄洋社』(井川聡、小林寛著)

「三崎烈士」「忠臣蔵」で知られる赤穂浪士が眠る東京・高輪(東京都港区)の泉岳寺の一角に「殉難三烈士」と書かれた石碑がひっそりと立っている。仲良く並んだ三つの石碑には、「捨生取義之碑(せいをすてぎをとるのひ)」の文字が刻まれ、三人の若者を顕彰している。福岡県人の山崎羔三郎、鐘崎三郎と鹿児島県人の藤崎秀である。



写真4 山崎羔三郎『鞍手郡誌』(昭和19年)から

三人は、日清戦争が始まって間もない明治二十七年(一八九四)十月、平岡浩太郎【筆者注・初代玄洋社社長】が開いた送別会に出席後、広島・宇品港から出征した。いずれも日清貿易研究所の研究生で、中国語通訳官としての従軍だった。

山崎は、玄洋社の「四天王」、「青年三傑」の一人と言われた人物。平岡の援助で、明治二十一年(一八八八)に中国に渡り、まず荒尾精の漢口楽善堂に入った。大陸の地理、風俗を調べるため、弁髪姿で中国十八省のほとんどを踏査。はだして歩き通し、足の裏は牛のひづめのように硬くなっていったというつわものだった。鐘崎、藤崎は、荒尾を慕って日清貿易研究所で学んだ。

三人は出征直後、秘密偵察を命じられた。遼東半島の攻略を目指す日本軍に先行し、敵地に潜入したが、清国兵に捕らえられてしまう。遼東半島の大連に近い金州の獄では、厳しい拷問が待っていた。山崎は、「我は大日本帝国臣民、福岡県土族山崎羔三郎なり」と堂々と名乗り、「速やかに我が頭を斬れ、我なんぞ死を恐れんや」と叫んだ。平然とした態度に獄吏も舌を巻いた。

処刑の日、清の法に従い、西南に向かって清国皇帝を拜するように命じられたのに対し、山崎は「何ぞ蛮王を拜せんや」と東方に向かって頑として動かなかった。獄吏は怒り、山崎の頭を刀で乱打した。山崎は三十歳、運命をともした鐘崎、藤崎は二十五歳、二十二歳だった。

三人の碑は当初、日清貿易研究所の出身者たちが金州城外の海沿いの丘陵地に建てた。しかし、下関での講和会議後、ロシア、ドイツ、フランス

の三国干渉で、遼東半島を中国に返還することになったため、守備隊が撤退する際に日本に持帰り、泉岳寺に移した。世論は国権主義的傾向を強めていた。国民は山崎らの「崎」を取って「三崎烈士」とたたえ、三国干渉が起きると、「戦争に勝って外交に負けた」と政府の姿勢に憤った。

日本ファシズム研究家の北九州市立大学名誉教授・安部博純は「国を強くするには国民を強くしないといけない。国権論と民権論は補完関係になり、どちらに重きを置くかが問題だったにすぎない。しかし時代が進むにつれて、国権派は国家の繁栄を最終目的にし、個人の権利は抑えても構わないという国家主義、ファシズムへと向かった。一方、民権派は社会主義、無政府主義へ向かった」と言う。

この近代日本の歴史の分かれ目のところに玄洋社があり、頭山満がいた。頭山は在野にあり、平岡は国会にいた。民権結社として出発した玄洋社は、この明治二十年代後半から、同志的なつながりを持ちつつも、それぞれがおのれの信ずる道を突き進んでいく。

【コメント】向野堅一と異なり、夢半ばにして異国に倒れた明治の青年であった。当時の理念に基づく行動を現在の理念で「大陸侵略の手先」と切捨ててしまうことに対しては抵抗を覚える。

## 二、山崎羔三郎の墓と記念碑

### (一) 山崎羔三郎の墓

円通院(曹洞宗、宮若市山口)にあり、筆者は平成二十年(二〇〇八)十一月に訪ねた。山門石段下の駐車場に説明板があり、次のように記され

ていた。

「千代松、お弁の方、大音青山、山崎羔三郎のお墓は円通院本堂の裏山三十メートルの所にあります。(中略)」

### 山崎羔三郎

日清戦争の時に諜報員として活躍。福岡市白水家に生まれ、明治廃藩の際、若宮町山口に移り山崎家の養子となる。明治二十七年(一八九四)十月三十一日中国に囚われ処刑される。三十一歳。英哲院忠山義勇居士 若宮町観光協会



写真5 山崎羔三郎の墓 宮若市山口の円通院墓地 (平成20年11月 筆者撮影)

本堂の左手の納骨堂を過ぎると裏山への石段があり、少し登ったところに説明板にある墓が横一列に並んでいる。左側・大音青山の大きな墓。中央・千代松とお弁の方の小さな墓が二つ並んでいる。右側・山崎羔三郎の墓 小さいが前に二つの

灯籠があり墓と灯籠の周囲は高さ二十cmほどのコンクリートできちんと仕切られている。仕切の外側の右手前に四角柱あり。(写真5)

墓碑の正面・故陸軍通譯官 山崎羔三郎之墓

裏面・征清役為偵察出入敵地明治廿七年

十月卅一日死於金州

官収遺骨賜之家人乃葬此焉？(字

体が異なる)

墓碑の左右の花立て 右側・奉 山口村在郷軍

人會 左側・奉 山口村青年會

右側の灯籠(仕切の内側)・七十年祭記念 福丸

錦町有志

左側の灯籠(仕切の内側)・昭和三十八年 若宮

町教育委員会

四角柱(仕切の外側) 正面・以特旨贈従五位故

山崎羔三郎 山口村、帝国在郷軍人會山口分會、

山口村青年會

右面・昭和四年四月十四日、裏面・昭和三年十

一月十日

今上陛下即位大典舉行(途中判読不能) 特旨贈

位(途中判読不能) 仍為記念建立

経年劣化と旧字体のため、全文を判読すること

はできなかったが、大意としては、「昭和三年十

一月十日の(昭和天皇の)即位の大典に際して、

日清戦争の殉難者として山崎羔三郎に特別に従五

位が贈られたのを記念してこの墓を建てた。」と

いうことだと推定される。墓碑の状態として明治

の死後に作られたものではなく昭和初期に作られ

たものと思われる。灯籠は没後七十年を記念して

昭和三十八年(一九六三)に作られたのであろう。

(二) 山崎羔三郎の顕彰碑

若宮ICから三坂峠を越えて福津市へ向かう道

路の右側、宮若警察署山口駐在所と山口コミュニ

ティセンターの敷地内に道路に面して山崎羔三郎

の顕彰碑がある。円通院へ左折する交差点の少し

手前。大きいのですぐわかる)

表面：殉難烈士 山崎羔三郎君之碑 頭山満

裏面：漢文で刻まれており、高い台座の上にあ

るため判読不能。末尾に「大正十五年十一月 陸

軍大将従二位勲一等功三級男爵 田中義一」とあ

る。

頭山満(一八五五〜一九四四)

山崎羔三郎が死亡したとき三十九歳と同年代で、

玄洋社も盛んに活動していた。このとき七十一歳。

何を思いつつ揮毫したのであろうか。なお山崎羔

三郎は玄洋社の社員名簿および伝記集に掲載され

ている。

田中義一(一八六四〜一九二九)

この後、昭和二年(一九二七)から昭和四年

(一九二九)まで首相。在任中に山東出兵、張作

霖爆殺事件が起き、退任直後に急死した。

三、山崎羔三郎と向野堅一の接点

『従軍日乗』(伯爵亀井慈明著) は日清戦争の

従軍記であり、国立国会図書館の「近代デジタル

ライブラリー」で読むことができるが、同書の六

三二ページから六三三ページに山崎羔三郎と向野

堅一の名前が出てくる。(文語体の原文を筆者が

要約した)

「敵情偵察の特別任務を帯びて清人に仮装し敵

地に潜入した六人の通訳官のうち首尾よく帰還し

たのは向野堅一氏のみであった。向野堅一氏は明治二十八年(一八九五)二月七日に第一師団の将校・下士官・憲兵・軍医と共に人夫十二名を引連れ、金州城西門外に埋められていた山崎羔三郎、鐘崎三郎、藤崎秀三の三名の遺骸を発掘し、名誉ある殉国者として丁寧に埋葬した。」

亀井慈明(かめい これあき・(一八六一〜一八九六)は公家に生まれ、十六歳で石見国津和野の藩主であった亀井家の養子となり、二十三歳で子爵、三十一歳で伯爵。イギリス・ドイツに留学し美術を学んだ。日清戦争で写真班を組織して日本最初の従軍カメラマンとなり、「明治二十七八年戦役写真帖」を明治天皇に献上した。戦場生活で健康を損ない死去。死後に写真集と従軍日記が出版された。著者は遺骸の発掘には立ち会わず新聞記者の記録を引用しているが、五月九日に三名の墓碑を撮影している。

まとめ

明治の青年たちのエネルギーのすさまじさに圧倒される。こうした先人がいたことは後世に伝えるべく必要があると思われる。

本稿は平成二十三年一月二十九日の郷土研究会例会での発表内容を要約したものである。

(さかき まさずみ)

「郷土直方」

直方郷土研究会会報 第三十七号

発行日 平成二十四年四月二十九日

編集発行 直方郷土研究会

〒八三三・〇〇二六 直方市津田町・中央公民館内  
TEL 〇九四九二一五一一二二四一

郵便振替

口座

加入者名 直方郷土研究会

口座番号 0174・8・31813

印刷所

(有)嘉麻綜合印刷

飯塚市片島一丁目一〇一四